

キヌちゃんが「京都の奥に素晴らしい秘境がある、そこへ案内しますよ」ということで、午後の日盛りの時間に出発した。むかしはGWの山行、今日と同じように暑い中を出発するが、信州の雪国、山の上はたっぷりの雪、たまには吹雪もあるというようにまだまだ冬まっさかり、冬用の下着にダウンとたくさんの防寒具が要った。「ダウンの上下を持ってきた」「ええ、そんなものが要るかな、持ってきてないよ」「飲み物は、ビール・日本酒・ワイン・・・」山の話よりこちらの話し、酒のこととなれば話が弾む。

葛川のキャンプ場は大入り満員「うはは、すげえヒト」とそのまま帰りたくなかったが広い敷地、いつもの場所で車を止めた。「暗くなるまでちょっと散歩」カメラとスケッチブックを持って出た、どこかいいところはないかな、それこそ足の向くままに歩いた。時間は夕方だけれど五月の今、陽はまだまだ照っている。木々の間を抜ける風の音が、車の走る音が、カラスの鳴き声、小鳥の鳴き声、せみの季節には早いはずだがとそんな音の数々が耳に響く。人のいないところに座っていると、いろいろ聞こえてくる、幻聴まで聞こえてくる「耳が聞こえないのか」とよくぼやかれるが、確かに聞こえなくなってきたと苦笑。

キャンプ場では6時ころ目覚めた。空には全体に薄い雲が白くかかっているけれど、今日は晴れそうな予感。葛川は周りの山の雨水を集め暴れることがあるのだろう、改修作業の重機が川の中に入っている。登山道も上からの下からの崩れ、自然の猛威には抗しきれず「あそこは注意して通らないと、ヤバイヨ」というようになっているそう。だ。「米を炊くぞ」と20分「蒸すぞ」と20分、米と味噌汁が出来上がり朝飯。昨夜はワインをたくさん飲んだ。

廃村八丁というところ、ロマンチックな命名だけれど、昔「山を管理せよ」と村の人が山の中に派遣されてできた村なのか。上り始め、しばらくは急登、こんな道が生活道路では人も住まないだろう、何本もの材木を木馬（きんま-材木を運ぶそり）で、前に後ろに担いで炭俵を、こんな道を通って運び出し、食料、衣料を運び返す、現代のわれわれでは考えられない生活苦、それが山人、山の人。同志社大学の研究棟がある、そこからは左右に分かれ、四郎五郎峠と刑部谷、刑部谷の方が近そうだと登るとすぐにロープが張られた下り、薄暗く黒い岩が水に濡れて光っている、慎重に底に降りた、岩盤の間を小川が流れ向こうには滝、滝があるからまっすぐこれなかったのか、迂回路なのか「昼なお暗く」という文句もあるが、木の葉の新緑と遅れてやってきたシャクナゲの花が華々しい。可愛い顔をした小川だけれどひと度増水すれば岩盤をも砕いてこの谷底ができた。50歳ぐらいの男の人、続いて50歳ぐらいの男女、こんなマニアックな山にも人がいるものだ。

2時間半で廃村八丁に到着した。「これは家がかった敷地の石垣」と思える石垣が数箇所、平たいトタンの三角錐小屋、「テントできています」と50歳ぐらいの人のテント、12時なのでここで昼食、朝炊いた米とカレーのパック、ザックに常備のスプーンで旨いと馳走になった。「廃村八丁」ロマンチックな名前、物語にでもなりそうな歴史があるのでとは調べた。この山林は豊かで、材木、薪炭が豊富だった、為政者はここを欲しがった、ということで60年間境界争いが続いたそうだ。豊かだとはいえ、物流は困難な場所、たった5軒6軒の家では物語にはいきつかなかったようだが、この場所を大事にしている人たち、歴史を伝えたいという人たちのグループがあるようだ。最後の人が出て行って完全に廃村になったのが昭和10年ごろ、そのあとに山の愛好家が何度も入り、歴史を調べ、数件の家の配置を調べ、苗字までわかっている。面白いのは壁に書かれた壁画、土蔵の壁に当時の銀座の風景が描かれていた、そのモノクロ写真が載っているが、線描でビルが、都電が、喧騒が、描かれている。描いた人のローマ字署名まで読み取れるそうだが、その絵が有名で一目みたいと登ってくる人もいたそうだ。

目的地の八丁を少し散策、階段がある、二本の棒が立っている、「これは鳥居？上が落ちた・・・？」「明治9年、五戸五家族の人たちが、この山林の所有権を認められた」ということを記念して、大きな石に丁寧に彫られた石碑が階段の上に転がり落ちていた。上には祠、下の川のそばにも地藏を祭った祠、昔のヒトの息吹を感じる。

廃村八丁をあとにして戻り始める、「帰りは四郎五郎峠を廻って帰ろう」と分岐を左へ、川の側を歩いていく、濡れた岩を踏んで滑りそうに、大きな木、オレが横になってもはみ出さないような大きな木、天狗の団扇の葉、トチノキだ、その団扇も出てきたばかりの初々しい若葉色、大きな木だ、嬉しくなるようなでっかい木だ、その周りにも、トチノキが幾本か茂っている、キャツラはまだまだ小ぶりだけれど。 9時から4時までの山行でした。

「え、これを登るのか」そういえばかすかな踏み跡、ささやかなテープもついている「登りが20分で峠に着く」杉の植林、自然林が交じり合った斜面を登りきると今朝来た“ダンノ峠”に戻ってきた。「あと1時間で登山口、出発地点」と峠で小休止。雨模様と心配も曇ってはいるが降ってはこない。この山はその名前で有名である前に、すがすがしい木々が生え、草原と小川、なだらかな山の姿、自然満喫の時間がたっぷり持てる、いい山だ。

京都の北、といってもここは日本海へ注ぐ由良川の一水源地帯の小盆地で、重畳と打ち続く四周の山々は鬱然と深い新緑の波で、私は身体の中までも青く染まってしまったような感じである。私は朝から小半時も、腿（もも）まで水にしたしながら遡行を続けて、やっとこの村に来たのだった。常套的な形容であるが、それは全く水晶を溶かしたような水で、初夏の陽の光が美しい紋を水底にきらきら投げかけて、石の一つ一つが揺らいで見える。その上を時々山女がすいと物の影を掠めるように遡っていく。〈略〉分教場の黒板には算式が描かれたままであり、壁には種々の掛け物や生徒たちの習字や絵が張り出されたまま、今にも生徒たちが帰ってきはしないか・・・これは、廃村すぐ、昭和初期に書かれた記事の文章だそうだ。

山から降りる途中の川で、シャツを脱ぎ身体を拭き着替えたので気持ちがいい。今宵の宿、止波峠（となみ）まで1時間強でやってきた。「雨模様、明日はここを何時間か散策して帰ろう、雨ではねえ・・・」と又飲み始めた。2リッターのワインの箱がもう2本目も半ば、「よく飲むねえ」「昨日は、半分記憶がない」「今日は明日のために飲むのを少しにしておくぞ」

ここは、京都府と福井県の県境。福井県知事のへたくそな字で「止波峠」とでっかい岩に、のみで掘られて書かれている。山崩れの多い場所なのか、道には落石が、落木が、路肩崩れが、整備が追いつかないようだ、「自己責任で通過しなさい」というような道、半年前の遠敷峠から百里が岳に登った時も、その自動車道が福井県側で長年通行止めになっていた。日本は災害の多い国、山崩れはいつの時期にもどこかで発生している、こんな国に住んでいるのだ、暮らしているのだと再確認。

「8時には寝るぞ、酒を切り上げるぞ」といいながら9時半になってしまった、2時ころ目が覚め、飲みすぎたと反省しながら又寝てしまい起きたのは5時ころ。外で体操をすると身体がしゃっきりし始め、サンドイッチを作って食べた、湯を沸かしてお茶を飲んだ。雨が降り出し、少しすると雨がやみ、またまた降りだした。「この天気では、だめだねえ、帰ろうか」「少しあるいて帰ろう」「傘をさしてでもいいから、少しだけ歩こう」

「木の葉がきれいだねえ」と叫びながらはたと気づいた。木の葉、草原の草、流れ落ちる水しぶき「これは光のいたずらじゃねえか」と気づいた。「おまえさん、いまごろ、なにを」と罵られそうだが「オレは絵を、光で描いていない、オレは、モノが在るということ、そんな絵を描いている」なんてえらそうなことを申しませんが、昔からそう思っていた。デッサンで描く、光を見て描く、「こちらから当たる光は、陽と陰と影を作る、これが基本じゃ」ということは百も承知で、その陽と陰と影を無視して、「その存在を描きたい、その存在が絵だ」なんて叫んで描いてきた。人にいう時には、教えるときには、「こちらから当たる光は、陽と陰と影を作る、これが基本じゃ」といつているが、オレ自身はこんなことを無視して描いている。そんなオレがカメラマンと話すうちに、「カメラマンにとっての光は絶対のもの」「光がなければ映像は存在しない」ということがわかった。オレが「光のいたずらじゃ」というように叫んだところで、カメラマンにとって「光がわかれば、写真はできる」「光こそが映像だ」と叫び返される。目の前の若葉の緑、空を見上げれば、曇った空でもさまざまな色に見えている、緑色の葉っぱが、さまざまな色に輝いている。「RGBの世界とCMYKの世界ですよ」単純にいうのもいいけれど、絵できらきら光る葉っぱを、水しぶきを、雪の舞い散るさまを、上手く表現するテクニシャンの画家もたくさんいるが、そんな話はまたまた別な話。そうか このあたりの緑色の葉っぱは、光が当たるから綺麗なのだと再発見。

止波峠から、西に行けば「ハヶ峰」東に行けば「杉尾坂」芦生の森に行くそう。今日は東に向かってなだらかな尾根道をしばらく歩いた。ブナの木が雄雄しい。雪に吹かれ、風に曲げられコブだらけのブナの木が素晴らしい。次回是非もう一度来て見たいものだ。

若尾五雄著<鬼伝説の研究：金工史の視点から>を読んで。これを読みながらこの話は何度か読んだことがある、今まで知っていたことがらとは少し違う、そう思いながらもこの話は真実かもしれない。仏教が入ってくる以前のヒトの考え方、近代のように物量がまだまだ溢れていない時代のヒトの考え方、ということを入念に入れて読んでいかないといけない。我々が普通に知っている話、平安時代以降からたくさん話が残された、今までそれは為政者の側に立って書かれた文章や物語でしかなかった。その反対側で生きていたヒトの姿が少しずつ浮かび上がってくるような気がした。若尾先生も、日本各地の土地に残った言い伝え、伝説、物語をたくさん集め、こうでないかな、こうであったはず、というようにまだまだ結論は出ていない話、推論の域を出ていない話。読み思いつくまま書いてみます。

えかきの立場から“金工”という言葉を知ると、日本の伝統工芸、金属の細工物を思ってしまうが、ここでいわれている“金工”は“鉱山”のこと、近代のように財閥系の大手鉱山会社が掘り進む鉱山とは規模が違って、細々と穴から掘り出していた鉱物のことらしい。

○桃太郎の鬼退治という民話は戦前には教科書に載っていた。戦後、米軍が「この民話の侵略的意図が日本の軍国主義を鼓舞する」という理由で抹殺された。霊魂としての鬼、人死魂としての鬼・隠（オニ）といわれているが、鬼とは「付近を荒らしまわり、ヒトをさらい、ヒトを食う、悪いやつ」と書かれているだけ。

○“鬼”“鬼ヶ城”といわれる地名、鬼の子孫といわれる家系が、各地にあるらしい。それらの地域はだいたい鉱山と関係を持っている。和名抄の隠（オニ）は本質的に鉱山の鉱穴の隠（オニ）である。

○酒呑童子 1) 越後に生まれ寺の稚児になったが、悪僧と交わって出奔、大江山に立てこもった。ヒトを殺し、ヒトの肉を食った。2) 大和：白毫時の稚児が、大江山に立てこもった。3) 日本海に漂着したロシア人が大江山に立てこもった。血のような赤ワイン、肉食が誤解された。4) 大江山には銅・金・ニッケルが産出した。酒呑童子はこの辺りの名家の出、都に出て娘をかどわかし金銭を奪い取るような凶賊ではない。5) 鬼退治ではなく「丹波の国に銅鉱床がある、そこに行って銅のことを調査して来い、向こうに酒呑童子という鉱山師がいる、手広く鉱山を掘っている、いろいろ教えてもらえ」というようなことではなかったか。6) 都からさらわれた姫君もいたが、貧乏貴族の娘が、地方の裕福な長者のもとに嫁がされてきたのではないか。地方の水に合わなかった悲しい姫君、のびのび地方の自然を、豊穡を、楽しんだ姫君、色々なケースがあったのでは。7) わが住まいにある茨木童子の伝説、近くに弥生時代の鋳型、ふいご、が発掘されている。

○修験者は優秀な鉱山師だった。仏教伝来以前の日本の宗教はシャーマニズムや道教であった。病氣や怪我で“おがみばば”がやってきて、ロウソクを点し叫びまわられるのはいやだが、そういう考え、そういう不自然、非科学的なもの、これらも少しは残して欲しいと思う。シャーマニズムや道教は仏教に比べて唯物論の教え、ヒトの永遠の生命を精神的に考えるのではなく、薬石・薬草を用いて努力する。難行、苦行だけでは効果が出ない、薬石・薬草を用いてトランス状態、エクスタシーを得ていた。本当に銅や水銀を飲むのか、身体に悪そうだ。

○日本の鉱山は仏教伝来以前からあり、水銀を採掘されていた。古墳の棺に水銀が朱色として塗られていた。道教は水銀、黄金のある山を聖地として寺社を建てた。

○あの有名なひょっとこのお面、“ひょっとこ”とは“火男”のことである、とはびっくり。この場合の火は、厨房のヘツイさんのちよろちよろ火ではなく、金属を溶かす大がかりな火のこと、口を尖らせふいごで風を送り、目を凝らして火の温度を確かめた、そういう技術者だった。

○中央構造線沿いにはたくさんの鉱床、色々な金属が出たらしい。現代は日本国内で稼働している鉱床はほとんどないが、どうも昔は盛んだったようだ。アメリカのように金鉱を掘り当て長者になって尊敬されるというようなことはなかったようだ。

こういうことを読んでみると、鉄ができるようになったのは、中世に近い出雲の地方からだったと知らされていたが、有史以前にも、日本のあちこちで、金属が掘り出され、加工され、利用されていたらしい。その技術がどこから来たのか。その技術者は誰だったのか、なぜそのことが表に現れてこないのか。鬼といわれ、恐れと侮蔑の目が感じられる、不思議な風土だ。

安威川河川敷で蛇（シマヘビ：70センチぐらい）を発見、今年初おめみえの蛇君だけれど、動かない「どうした・・・」と立ち止ってじっと見た、頭の辺りがおかしい、アレレ、自転車にでも轢かれたのかと目を凝らすと、かえるの足を銜えている。普通、蛇は人の気配を感じると、ささっと草の中に逃げ去ってしまうのだけれど、彼は食事中、しかも銜えたばかりの様子、尻尾の先を痙攣させている。邪魔をしては悪いとそっと下がったが、彼も、ささっと草の中に逃げ去ってしまった、かえるがどうなったと跡を見たが、かえるも蛇もいなかった、あそこまで食いついたら、完食で終わってればいいが、無事飲み込んでいますように。

べてるの家の「非」援助論という本「読んでみませんか」とキヌちゃんより借りた。ひとりの著者があるようなないような本だけれど、面白かったので紹介します。オレが子どものころ、近所に精神病院があった、それを「キチガイ病院」と呼んでいた、それが禁止用語というなら失礼しますが、窓には鉄格子が嵌って外部と隔離されたさまは刑務所のような感じだった。50歳代のころ、刑務所見学に連れられて行った。重症の薬物中毒受刑者がいる棟は、部屋の扉が閉まり、中でヒトが部屋の隅の床に丸くなってごろりと横向きに寝ていた、もう起きることがないのかと思われるような、ヒトが潰れてしまったような感覚を覚えた。キチガイ病院の入院患者も、隔離され、押し込まれ、刑務所の独房のようなところで、将来、そこを出ることがないのでは、ずっとそのままそこに寝そべて、命が尽きるまでいるというように思っていた。この本は、実名で、彼らを紹介している、分裂症です、こんな事件を起こしています、こんなことで悩んでいます、というようなことを個人的に縷々語っている、ベールに包まれた精神病棟の内部の話、個人的な分裂の度あい、どれだけ迷惑をかけているか、どれだけ狂気を発揮しているか、どれだけ落ち込んで悲しんでいるか、というようなことを赤裸々に語り、話すことによって、叫ぶことによって、自信を回復し、自分を取り戻し、しかも金を儲ける。昆布を売る、自身の体験談で講演をする、これらの事業、この金を儲けるといふ話、これが大事なのだ。分裂病、精神障害を起こす元凶が「もっと金を儲けよ、社会生活をせよ、規律を守れ」というように上から下から左右から揺さぶられ、細い神経が切れてしまう。いったん切れてしまったら、今度は個室に隔離して、「じっとせよ、そっとせよ」と薬漬けで社会から隔離し将来の社会復帰も怪しくなる。そんな時に「ゆっくりやろう、失敗もいい、サボりもいい、自分をさらけ出してみれば、それを金儲けにしてみれば、儲けることが大事、精神障害者にとって」なんて反対のことを言われ、はやし立てられ、命を取り戻す、自分を取り戻す、これはいいねえ。

北海道襟裳岬に近い浦河町そこに「浦河べてるの家」がある。浦河日赤病院、精神科病棟を退院した人たちが昆布の産地直送事業を始め、いまや、年商1億円、100人を超す元入院患者が働く大企業になった。と簡単に言うが、本の中では、失敗、失望、再入院、救急車、消防車、パトカー、地元の人たちとの連携と軋轢、さまざまな場面が載っている。これらを乗り越え、精神分裂病、うつ病、というような精神障害を持つ人たちが社会と関わりを持っていくさまが載せられている。皆さんの叫びを読んで、オレは嬉しく思っている、素晴らしい。今まで“塀の中”のこと、ベールに包まれ「見られない世界、見てはいけない世界」と思っていた。

寛：私を再定義する試み：僕は今まで、いわゆる感情の爆発で、自分に対しても家族に対しても、多大な迷惑をかけてきました。僕は精神分裂病です。発病は高校を卒業して予備校に通っている最中です。幻聴や念仏が聞こえるようになり、誰かに狙われ盗聴されているというような被害妄想におそわれるようになりました。苦しいのは親のせいだと自宅に放火する大失敗をしてしまいました。その結果精神病院に強制入院となりました。それまでも親を他の学生を殴るという非生産的なことばかりしていました。その後は、深い罪悪感に苦しみます。自分の研究「自分の爆発のメカニズムを研究して家族を幸せにしよう」「自己研究の方法は、とにかく周りのヒトに自分のことを話すこと」爆発とは、さまざまな人間関係のストレス、いらいらが高じて起こります。要するに今の自分が受け入れられないのです。親に難癖を付ける。親を殴る。茶碗を投げつける。ちゃぶ台をひっくり返す。周囲が一番困ることをする。ひきこもる。童心に戻る。親は爆発処理班になる。ご馳走が増える。親が自分に気を使い、身体を悪くする。研究結果：周りのヒトに爆発を受け入れてもらい、自分もそれを認めるよう心がける。 <つづく>

精神障害を説明する言葉は多々あるが、それを一口で言うと「人づきあいに困難を生じる病」である。勤勉で、笑顔絶やせず、他人と協調する、ということの正反対が起きてしまう。それゆえに社会から孤立し、身近な人間関係、家族や職場で軋みが生じ、生きづらさを感じてしまう。もちろん当事者は、わざととしているのではない、理解力、記憶力が低下し根気が続かない、ヒトの話し声が悪口に聞こえる、そのような現実の中で何より自分が落胆し、不甲斐なさに腹を立て、普通の何倍かのエネルギーを費やして彼らは生きている。

精神分裂病の治療には、薬物療法と非薬物療法があるが、SST という非薬物療法、social skills training 日本語で<生活技能訓練>と呼ばれる。通常リーダー的役割のスタッフと10人程度のメンバーが輪になり、スタッフやメンバーから課題が出し、みんなで議論する・・・これを読んで、人権講座で「話し合おう」「コミュニケーションをとろう」ということでの話し合い、集まりと同じではないのかなと思った。何人かのヒトが集まる、「さあ始めましょう」といいながら、初対面の堅苦しい雰囲気なくすために、自己紹介のときに<あだな>をつける、順番にボールを手渡す、「無言で誕生日順に並んでください」と並んでいただく。オレは自作の紙芝居形式の自己紹介を常に持ち歩き、恥ずかしげもなくそれを披露し、5分も経つと場が和やかな雰囲気になる。ルールを決めて一人ひとりが話し合う、ヒトの話したのを聞いたヒトが、「こういうお話でした」と披露する。今まで知らなかった人同士が、普段ならこの人は苦手、普段ならこいつとは話さない、という方々とも、目を見て話し合う、「見た目とは違うヒトだった」「優しい顔をしてなかなかきついことをずばりという」とそれぞれがわかり合う、話し合う。そこから心が安定し、充実感、幸福感が蔓延する。「仕様もない会議に出席して、寝言のような言葉を、2時間も聞かされた、つまらない時間を過ごしてしまった」という会議・集会在横行するが、この方法、一度試してみてもいい。

自分たちが「このように、おかしいのだ、普通じゃないのだ」という集まり、“幻覚&妄想大会”の一部を紹介。

K男さん：共同住宅の2階に暮らす彼、夜中トイレに行くのが面倒で、いつも2階の窓から放尿していた。ある晩、窓を開けると、今までにかいだことのない異様なにおいが立ち込めたかと思うと、窓際に突然緑色と茶色のブチの牛が現れ、噛み付かれそうになった。彼は「殺されると思った」という。その後で、「2階の窓を覗きこむ牛の足は長いのか、キリンのように首が長かったのか」と議論が大いに盛り上がった。

H男さん：彼はなんと妊娠してしまった。入院中に、とある看護婦さんに片想いをしてしまった、その途端、その看護婦さんとの子どもが彼のおなかに宿り育ち始めた。残念ながらつわりとともに、流産してしまった。

T子さん：共同住宅で暮らす彼女の部屋には、中学生時代の同級生が同居している。名前はO君、これは“幻聴”さんなんだが。O君は天井の隅で暮らしている。T子さんに「O君とは、10年以上も同棲しているんだね」というと照れくさそうに笑う。「O君が、あまりご飯を食べるな」と太っている私にいうの。「聞いたら、O君は、痩せてスタイルがいいっていうの」

Y男さん：彼の周りには721人の幻聴さんが飛び回り、多いときには、2000人の幻聴さんを引くつれて、講演をしに行く。「みなさん、こんにちは。今日は、2000人の幻聴さんが僕と一緒に飛行機に乗ってここにやってきました」彼の幻聴さんはどんどんモデルチェンジする。そのつど紹介される。

医療現場では、幻覚妄想は非常に忌まわしいもの、つらいものと考えられてきた。だから幻聴の中身に立ち入らないことを重視し、何とか薬の力で封じ込めようとしてきた。しかしすべての人の、幻覚妄想が単純に薬の力で消えるわけではない。孤独で将来に希望のない中で聞く幻聴は、おしなべて「死ぬ」とか「馬鹿」とか、とにかく嫌なことを言うところ。ところが不思議なことに仲間が増え、人とのコミュニケーションが豊かになると、幻聴にも愛嬌が出てくる。当事者の体験を聞かされるにつれ、幻聴との付き合いは、人との付き合いに似ていると思う。その人自身の日々の人間関係、暮らしのスタイルと密接に関連していることがわかってきた。

二日前、中西プロから「又、拓本とる、てつだって」「OK、いくよ、隣にいる、ミカさんも行くといっているよ」「みんなでがんばろう」現場に行くと大きな石碑と灯籠、「大嶺」とか「妙見」という大きな字は普通に読めるが「これ、字かな?」「ここにも文字があるよ」石を水とたわしで洗うと「建之」という漢字の下に、この地域のヒトの姓名らしき文字がだんだん読み取れる。ごつごつの自然石に鑿で雑に彫った文字は100年の風雪で全く消えかかり、といいながら「あ、これは00さんの名前だ」と叫ぶと、地元のヒトが不思議そうに覗き込んで「00姓名は隣の爺さんの名だ」「目の前の灯籠なのに、へええ、あのヒトの名前かあ、あの人がこの灯籠に金を出したのかあ」とどんどん解明し、その石碑の施主の名がほとんど解明できた。茨木の山の中、妙見さんの参道の碑、大峯講の碑、護摩をたく場所、150年前の石工の作業が見えてきた。

先日来何度か訪れている“木地山”山から下りると4人の男女、地元のじいちゃん、遊びに来ている初老の息子、小浜からの二人、オレと同年輩の探鳥夫妻。じいちゃん「ここも、ほんとのさば街道」「50年前は小浜の人が魚を担いで歩いてきていた、ここらのモノも小浜まで歩いて行った」「あんたらが登った道は、昔はちゃんと歩けた道、小学生が向こうに歩いていける道、今は荒れているけれど」この道、峠まで2時間かかった、峠の向こうは短いとしても、往復6時間の上り下り、昔の人は健脚だ。茨木も、ここも、道には100年200年の時代があり、たくさんのヒトが通り、じっくり聞いてみれば、たくさんのヒトの物語が、喜怒哀楽があったのだ。

レコーダーより：今、谷沿いの道、右岸を登っている、目的地は木地峠。以前下ったことがある道、迷いながら、えらいところに来てしまったと、こわごわ下った、林道が見えた時にはほっとしたという道、今は国土地理院の地図を持参、歩き始めると赤いリボンがついている、これなら安心。再三の渡渉、昨日一昨日、多少雨が降ったのか水量が多い。「あっち?」「こっちだ、まちがった、がはは」右に左に間違いつつ、川に落ちれば、ポチャリと靴が浸かる、尻が浸かる。ツルリとひっくり返り打撲骨折では洒落にもならない、人っ子一人いない山の中、死に繋がりがかねない、靴がぐちゃぐちゃ、尻がべちゃべちゃ、それぐらいなんのその。とはいえさっきは、ずるりと滑り靴が水の中に、さっと引き抜いたが、靴の中、やや湿度が増した感かな。

ちょうど2時間、峠に着いた。板で囲った小さな祠の中には地藏さん。ほとんど最後まで水が流れていた。何度も渡渉、トチノキとカツラの木、「大きな大木」「これはおかしな表現・・・」途中で飯場小屋の鉄骨残骸、一升瓶に大きな釜、大きな鉄のウインチ、オレンジ色の塗装がまだ残っている、太いワイヤーが巻かれた輪、50年ぐらい前の杣人が現れてきそう、酔ったおっさんに、姉さんかぶりの飯焚きが上手い割烹着姉さん。

若狭駒ヶ岳に向かう尾根道、だらだらの上り下り、来たことがあるなあと周りを見る。ブナの若木がびっしり生えている、新緑の季節が過ぎ、木々の緑も浅黒い、木の茂りで景色も見えなくなっている、今日の空模様も晴れてはいるが霞んでいる、下界の暑さはない、ほどよい風、ほどよい温かさ、旨い空気。

「ななかまど」「かまつか」「硬いから、釜のつかにする木、又の名を、牛殺し」「へえ、そんなに硬い、牛をたたいて殺す?そんなに硬い・・・」「あ、花、これはホウの木の花」「え、これが、タイサンボクと一緒だ」我が家のタイサンボク2年前から元気がない、葉も花も小さくなってきた、葉がすかすか、花も小ぶりでまばら、どうしたものやら、このホウの木の花、白く大きく、しかもすぐに褐色に濁りくすむさまはタイサンボクと一緒だ。

「日陰がいい」「お昼にしよう」30分ぐらいで飯を食って出発、「なんだか曇り始めた」「まさか雨」「ところによっては、風雨、雷の予報」「まさかそれ」レコーダーの録音も風の音で、オレの声が聞き取れない、ヒューヒューゴーゴー響いている。「寒い」「服は、今日に限って何もない、いやヤツケの上下はある、シャツも1枚入っている」「駒ヶ岳0.7」「木地小屋2.7」と書かれた標識、ここからも麓に下れる、木地村からは、いくつかの道から尾根に登れるようだ。目的の池に近づくと、風も弱くなった、雨は降らなかった、「あ、池」前よりは水は少ないようだけれど、絵葉書にしたいような景色、森の中の池、中ノ島には格好のいい木が数本、あちこちに白いボールのような、綿菓子のようなものが木の葉にぶら下がっている、モリアオガエルの卵だそうだ。パン、菓子、コーヒー、少し休憩をして、麓に下った。

ラジオから「〇〇さん<歌手>の訃報を知りました 悲しい 残念でしかたがありません・・・」「この悲しみをどう表現したら どう乗り越えたら・・・」「また天国で 会いましょう・・・」という声が聞こえてきた。以前にも「〇〇（作家）が亡くなった・・・」「残念だ・・・」「〇〇のいうこと 話すことは 心の糧だった・・・こんなに悲しいことはない・・・」このように心底嘆いている友人を見たことがある。親族や身内や普段接しているヒトが亡くなったら「そりゃー 悲しい・・・」いかなオレでもそういうが、本や画像や音声でなじんでいるヒトが亡くなったからといって悲しくはない。もう、生の彼の声や画像は見られない、本や舞台には接し得ない、彼の新しいものは出てこない、残念だとはいうけれど「悲しい 悲嘆にくれる」ということはない。

死ということなどつい2年3年前まで考えもしなかった。自分にとってはまだまだ先のこと、ヒトのことだと思っていたが、体力が弱ってきた、身体がいうことをきかなくなってきた、肉体的にも精神的にも、情念が、感性が鈍ってきている、と感じるようになってきた今、肉体の滅びということを感じるようになった。死とは肉体が停止する、精神とか感性とかいうけれど、それは肉体あってのもの、肉体がなくなればそれで“終るもの：the end”と思っている、それが、オレの死生観、再生も、復活も思っていない。死とはそれで“終るもの：the end”ということだ。死が怖い、死はいやだ、とはもちろん思うが、それとこれとは別物だ。

死生観の話はたくさんある、宗教も哲学もどんなことをいっているのか。\*ヒトに生まれて、死んだら、またヒトに生まれ変わる、動物に生まれ変わる、いろんな生き物に生まれ変わる。\*そのまま同じヒトになる、そのまま次の世界で同じように生活をする。\*向こうの世界で生きていく、向こうがどんなところかはわからないが、同じように生きていくのか、違ったヒトになって生きていくのか、向こうの世界のヒトになる。

パラパラと調べてみた、これらが正しいのか間違っているのかはわからない、また書かれていることが、死者に対する考え方、死者の扱い方で、死を見つめるヒトの話、死生観の話ではないかもしれないが、並べてみた。

○ヒンドゥー経・仏教では、今ある肉体は単なる靈魂の容れもの、こんなものは焼いて捨て去ればいい、大事な靈魂が再生する、輪廻・転生というような言葉で表現されるように、生まれ変わる。

○道教では、ヒトは死後も生前と同じような生活が続く、土葬にして死者の回りには生活必需品を置いておく。

○古代エジプトでは、死は新たな人生の始まりということで、遺体をミイラ化した。

○ユダヤ教・キリスト教・イスラム教では、死後、ヒトは復活する、呼び戻され、審判を受ける。永遠の命を与えられるもの、地獄に墮とされるものに分かれる、という復活がある。そのために土葬にする。火あぶりという刑は極刑なのだ。極悪人なんだ。

○古事記は、黄泉の国を書いている。腐乱し、不浄の世界を書いている。

○縄文時代・弥生時代では、死の直後“よみがえり”や“復活”の儀式が行われる、呪術や殯（もがり：ヒトの死後、本格的に埋葬するまでの間、遺体を安置し、礼を尽くして靈魂を慰める）魂振る（たまふる：魂に活力を与え復活させる呪術）が行われ、死亡確認後は穢れを葬送で浄め、恐ろしい靈魂の冥福を祈り、鎮魂した。

人生五十年、今や人生九十年、それぐらいの時間生きたヒトはそれぞれに喜怒哀楽を楽しんだが、まだまだもっとというのか、もう充分ですというのかは知らない、50年90年は自然な年月。それを待たないで亡くなっていったヒトには気の毒だ、これはかわいそうだ。今は次のように考えるようになった。ただ最近の科学の話、宇宙が生まれて何百光年、地球が生まれて何十億年、日本列島にヒトが住みつき始めて5万年、わが住まいの近所で、銅鐸を作っていたのが二千年。人間の身体を形づくっている物質の大きさが、1ミリの0乗分の1よりまだまだ小さい世界、そこに電子やら陽子があって駆け巡っている。こんな時空の話、恐ろしくデカイ時間の話、また反対に、恐ろしく小さい空間の話、「へえ、そんな世界があったのか」と驚くと同時に、今のオレ、今の生活、今の喜怒哀楽、いのち「そんなものがどうした」「そんなものはどうでもいい」というように、おおらかな気持ちになる。仕様もないことを考えるな、ということになる。今日はこんなそれこそ、そんな仕様もないことを考えていた。

朝7時：茨木を出発。メンバーは、相・前・増・岡村の四名。相車は7人乗りのセダンだけれど、4人のテント泊の荷物が車後部にうず高く積まれている。いつもの垣さんは、膝いたで欠席。

1時：目的地、麦草峠の駐車場に着いた。「登山靴に履き替え、荷を全部持って、池まで行きましょう」荷が多いのでもう一度取りにこなければいけないかと思ったが、なんと皆さん、それぞれにザックを担ぎ、両手に袋をぶら下げると、荷物が全部もてた。10分でキャンプ場。板張り台の料金込みで一人が1000円だ。去年は500円だったかと思ったが、トイレを見てびっくり、靴を脱いで入るトイレのなんと綺麗なこと、トイレ料金も込みなら納得だ。

2:30: テントを張り、夕食までの時間「散歩しましょう」「にゅうまで行きましょう」と出発。池を一周するので時計回りで歩き始めた。去年来た時は雪が相当あったのでわからなかったが、木道がどんどん続いている、とはいえ、所々にまだ雪がある。大阪からの長袖、半袖のTシャツ重ね着は、じっとしていると寒い。水、パン、冬用ヤッケをザックに詰めて進んだ。

「あと150メートルで にゅうですよ」とgpsを持っているSさん。「散歩というから、サンダル履きで来れるところかと思ったら・・・」「すみません 立派な登山ですね」などと大笑い。池を離れて30分ぐらいは湿原もある湿地帯、今の季節はあまり綺麗ではないが、それでも緑色の苔だらけ、木々も針葉樹、大きな木がたくさん折れ曲がり、裂け、倒れている。以前、しらびそ小屋から少し行った所で見た光景は「鬼が暴れて木々をなぎ倒したような」と表現したが、ここは鬼なら子どもの鬼だ。にゅう、に近づき登ってくると地面も乾き風雪による倒木はない。

「うわわ すごい きれい」てっぺんの岩の上に登った。手前の小山に邪魔されるが、硫黄岳の左半分が見える、天狗岳も見える、雪が残っている、あそこまで行ってみたいねえ、次回は是非。岩ごろごろの登山道、歩きにくい、「みやまくさごけ」と書いてある、もうひとつの名も書いてあったが忘れてしまった、わからなかったが、苔の種類が違うようだ、雨の季節になると、緑の世界に変わるのだろう。「さあ ビールが待っている ごちそうが待っている」テント場に戻り、食事の用意、「外で食べましょう」それぞれ防寒具を着込み、ライトを持って、小屋の前の野外食卓に材料を運ぶ。コンロ、鍋、食材、飲み物「火をつけて」「ビールを開けて」「野菜を取って」「まずは乾杯」そのあと、テントの中でも飲んだらしく、寝たのは11時だそうだ。

8:30 雨池に向かって歩き始めた。テントをたたみ、パンや麺で食事、昨日と同様荷を担ぎ、人も荷も車に乗せ、1キロほど西へ移動。北八つはころころの岩、湿った森林、緑の苔、木々は針葉樹、松、杉、檜しかわからないが、ちょっと違う名前、聞いたことのある名前、広葉樹の森とは違って、とがった感じ。昨日の鍋は旨かった、豚のバラ肉、あげさんに野菜。豚はとろりと、あれは旨いねえ。ビールと日本酒、これも旨いねえ。

雨池に着いた。「わああ きれい」「白駒池と 雨池 どちらがいいですか」「白駒池」「雨池」答えはまちまちながらどちらもいい。雨池のほうが少し大きいか、ここら辺りは、広々とした感じ、この広々感がいいねえ。それに比べ、白駒池は山が迫ってどんどん水がたまる、ボートもある、小屋も2軒ある、駐車場から10分で、登山姿でなくてもこられる。雨池は車道から歩いて1時間、道もあやふやだし、しっかりした服装が要るし、「ちょっと散歩」というわけにはいかない。「三人はここでのんびりします」というお言葉に甘えて、「それじゃ 縞枯山まで 登ってきます 2時間半ぐらいで降りてきます」水とパンをリュックに入れた。

縞枯山まで登ってきた。雨池から登山口まで30分、分岐までが25分、ここまでが25分。まだまだ雪が残っている、1.2年前の、もう少し雪があった季節、澤山さんと同じ道を歩いた、急な坂道をハアハア、上を見上げたら空が見える、もうすぐだ、といいながら登った姿を思い出すと懐かしい。山の中に居るとわからないが、この山の斜面、縞模様の木が枯れているようだ。ここからは生い茂った緑の中に、白く枯れた木の幹がよきよき立っている、たくさん立っている。15分ぐらい休憩して、すぐに下った。岩コロコロの斜面は、雪があるので歩きやすい。

「ヤッホー」「おお無事やった」「ラーメン食べる」雨池に帰り着き、迎えられ、カップラーメンの中に小さいおにぎり入りをお願いした。「どこを登った」「あのへこんだ峠から あのとてっぺんまで」我ながらよく登れたと、感心するやら、なれど嬉しい限り。

3:00 出発。石遊(いしやす)の湯につかり、11時に家に帰り着いた。